

尾崎一雄研究

——戦後の虫に関する作品から見た死生観(上)——

吉 田 遥

はじめに

尾崎一雄(一八九九—一九八三)は私小説家であり、二度の大病に悩まされ関東大震災や太平洋戦争を体験した作家でもある。その作家生活の中で特に目立つのが虫に関する作品である。同時代評においても、斎藤兵衛氏の「尾崎一雄が『蟲のいろいろ』はいふまでもなく、そのほかの作にもしばしば蟲についての観察や感慨をもちこんでゐることは誰でも知つてゐる。」^一という指摘や本多秋五氏の「虫の話が出てくると、急に生き生きしてくるから、妙である。」^二という指摘があるように、一雄が虫作品^三を多く書くことは周知の事実であつた。

さらに一雄自身も「わが小説」(朝日新聞)一九六一年一月九日)で「六十一歳の現在、振りかへつてみると、自然の前には人間も虫けらも、という考えがずっとつづいてゐる。——いや、つづいてゐるだけでなく、そういう考えが一層強くなつてゐる。」と述べており、一雄の作家人生において虫作品は重要な立ち位置にあつたと

いうことが分かる。その虫作品の量は、太平洋戦争の前と後で変化する。文章を書き、初めて原稿料をもらった『二月の蜜蜂』を処女作とすると、戦前の一八年間では『二月の蜜蜂』一作品だけであつた虫作品が、戦後五年間では四作品と増えている。そこで戦争が一雄の執筆活動に何らかの影響をもたらしたと仮定し、処女作である『二月の蜜蜂』と、太平洋戦争後五年間(一九四五年九月—一九五〇年九月)に書かれた虫作品に注目し、虫の描写にどのような変化があるのかを見ていく。そして最終的に一雄が戦争からどういった影響を受け、それによつて死生観や人生観にどのような変化があつたのかを探りたい。

一 私小説における一雄の技法と思想

作品論に入る前に、まずは私小説における一雄の技法を見ていきたい。一雄は自身の随筆「私の小説作法」^四で自らの作品の表現方法について触れており、『虫も樹も』^五という作品の題の下に「人間

も」ということが余韻としてあるという雑誌の合評を評価し、『いつた方がよい』ことを『いわない』のが、私の作法の一つ」と述べている。さらに虫と人間との関係性については、序章でも述べたように「わが小説」で処女作『二月の蜜蜂』について述べる際に、以下のように書いている。

書きたかったのは自然の前には人間も虫けらも同じだという陳腐きわまる考えに過ぎなかった。そのことを認めざるを得ぬ腹立たしさを、やつきとなつて書いたのだつた。もちろん、妹の死がしやくにさわつたからである。(略)六十一歳の現在、振りかえつてみると、自然の前には人間も虫けらも、という考えがずつとつづいている——いや、つづいているだけでなく、そういう考えが一層強くなつている^六

以上の二つの文から一雄の作品の中には「自然の前には人間も虫けらも同じ」という思想が隠れていることが分かる。そしてその思想は処女作『二月の蜜蜂』の書く際は腹立たしいものだったが、作家活動を続ける中で長く繋がる思想となつた。注目すべきは、その思想は妹の死によつて生れたということである。死と虫の描写には密接な関係性があると言える。しかしそれ以外の技法については指摘が見られなかった。

そこでさらに一雄の技法を明かすため、次に同時代評や先行研究の指摘を助けたい。まず浅見淵氏は「尾崎一雄論」^七で、私小説は厳密に言うところ私小説と心境小説に区別されるとし、以下のように続けている。

私小説は自我を粗野の儘抛り出して身边を描き出したもので、(略)心境小説は同じく身边瑣事を叙しながらも、「私」の姿を理想化すると共に、必然的に、「私」のその時々々の精神的欲望によつて描くものを選択する。

尾崎自身もこのことを口でいひ、また、慶々感想にも書いてゐる。そして、自分は私小説家ではなく心境小説家であると、ハツキリ宣言してゐる。

一雄を心境小説家とするならば、浅見氏の言う理想化された「私」の姿や精神的欲望とはどのようなものだろうか。高橋英夫氏は「存在の揺らぎと重さ」^八で以下のように述べている。

一口に私小説と言ひ切られてゐる尾崎一雄の世界には、この作のみならず、多くの場合、こういう人間の力の範囲をこえたものへの感受性が隠されている。場合によつては、それは作者自身にも隠されていたかもしれない。

高橋英夫氏は「人間の力の範囲をこえたもの」として水の音や蜜蜂の描写を挙げている。また、唐戸民雄氏は「尾崎一雄（独自性）の獲得——『二月の蜜蜂』と『暢気眼鏡』を中心に」^九で心情を表す媒体について以下のように述べている。

尾崎一雄は自分自身を裁断しながら、作品を構築する私小説

作家であるが、直接心情を吐露することは殆どない。心的に触発される媒体としての登場人物を作中に配置し、それとの密接な関係を通して間接的に自己を表白する方法を採るからだ。

この「心的に触発される媒体」とは虫作品において自然描写のことを指すと言える。これに高橋英夫氏の指摘も含めると、一雄は心境小説家として自然描写によって事実理想と精神的欲望を加えているということが見えてくる。しかしながらその自然描写、特に今回テーマとする虫の描写については先行研究ごとに認識が異なっている。例えば、石原千秋氏は『私』は「そこで蜘蛛の身の処し方(?)と死というものとともに歩んできた自分とを重ねて考える」^{二〇}と、虫の動きと人間の動きの同化を指摘している。一方で、永淵道彦氏は『私』と蜘蛛をはじめとする虫たちとを『生あるもの』として対等に対峙する「二」という人間と虫が同じ立場であるという指摘をしている。先行研究ごとに指摘は異なるが人間と虫の関係性が虫作品に取って重要であることは間違いない。

次に私小説における一雄の思想を見る。まず思想を探る上で重視すべきことは、一雄の生まれた家が代々神奈川県下曾我の宗我神社で神官を務めている家系であることだ。一雄の宗教については永藤武氏が「尾崎一雄の宗教的感性」^{二一}で詳しく検証している。永藤氏は「現実の祖父や父の生きた姿をぬきにしては神道なるものを考えられない」と指摘した上で一雄は祖父のことは嫌っており、父に対しての思いは屈折していると述べている。一雄は、父の「敬神家」^{二二}である面について異質さや寂しさを感じながらも「少年時代から一種の共感と敬意を抱いていたことは否定できない」と永藤氏は指摘

し、まとめとして以下のように述べている。

父八束がそうであつたような意味においては、尾崎一雄は神道家でも敬神家でもない。あるいは他のいかなる既成宗教にも価値的に与しようとしなない点において、無信仰と言われるべきかもしれない。しかしながら、それをもつて尾崎を、反神道的もしくは反宗教的とするなら、全く当を得てはいない。その宗教性を根底で支える感性は、他ならない神道的なものであるとみてよいであろう。

永藤氏は、一雄が神道家でも敬神家でもないものの感性には神道的なものがあると述べている。神道とは、「日本民族のあいだに発生した固有の民族信仰と、それを根底とした精神的な営み」^{二四}のことだが、教義や教典がなく、特色のある性格を形成している。神道の性格について『万有百科大辞典四哲学宗教』^{二五}から一部抜粋する。

(一) 多神を承認する。神道でのカミは唯一の絶対者ではない。神道のカミは、古代に自然とのかかわりの深い生活のなかで自然現象や自然物の驚異的な威力、呪力を畏怖し、それをカミとし、ついでそれに働く霊、魂の力をカミとし、さらに民族の始祖もカミとして崇拜するようになり、国家統一の段階でそれらの神は最高神を中心としての統合した形で認識された。

(二) ヒトはカミにより生命を授けられたものであり、この世に何らかの使命をもつて生まれてきているとの自覚を有していた。

(三) 共同体意識が強い。

(四) 自然との調和。カミはヒトだけでなく、自然物、動物、植物、無生物をもヒト同様に生命を与え、生かしている。

(五) 明るさ、善意にみちたものを示す。

(六) 現世中心である。

これらの中で注目すべきは四番の「自然との調和」である。このことが虫の描写に生かされた可能性は高い。また、他の項目についても、それらの性格が実際の作品で現れるかどうかとも見ていく必要がある。

二 一雄と戦争

虫作品の戦前、戦後の変化を検証するため、各時期の一雄の心境を『あの日この日』一六を参考にし、見ていきたい。『あの日この日』によると、太平洋戦争前に「海の会」一七に参加していた一雄は海軍省による正式の慰問団、海軍前戦慰問団の一員として海南島から仏印方面へ渡っている。そこで一雄は海軍の様子を観察し、海軍への信頼を強めるのであった。それは「海空軍の様子は、半月でつぶされるほどの弱体とは金輪際思へなかつた。」という言葉や「私はみんなより日本海軍の力を信じてゐた。」という言葉から読みとる事が出来る。

その一方で社会は開戦へと着実に足を進め、一九四一年（昭和一六）十二月八日三時一九分、日本軍によるハワイ真珠湾の空襲。即日太平洋戦争が始まる。この時の自らの気持ちについて一雄は以下のように述べている。

いよく米英相手の戦争が始まったことは大きなショックであり、エライことになった、と先づ思ったが、真珠湾の大戦果には全く驚き、同時に歓喜昂奮した。（一）

また開戦した直後に一雄が書いた「時至る」（「都新聞」一九四一年（昭和一六）二月八日）という随筆では以下のようにある。

緒戦には、國民の豫期以上の大戦果を挙げた。わが海軍の長い間の苦心錬成と、隠忍自重の極発せる果敢さによつてこの輝かしい門出を見たことは、何よりである。アングロサクソン人を亜細亜から放逐せよ、と叫びたい。彼等は彼等の犯せる罪の荷を背負つて自分の生れた所へ帰つてゆくがいい。亜細亜は初めて亜細亜になるのだ。日本を盟主とする亜細亜民族の大行進は始まつた。民族の大いなるロマンの夜は明けたのだ。

以上のように、開戦直後の一雄は日本軍による真珠湾攻撃成功に歓喜し日本軍を称えている。この勝利の後も日本軍は一九四二年に入りティモール島など、次々と島を占領した。しかし六月のミッドウェー海戦によつて日本は四空母を失い戦局は悪くなっていく。一雄はこの頃のことを「私（ばかりでは勿論無い）の中には悲観的見通しが徐々にふくらみ始めた。」と書いている。

その後、一雄は胃潰瘍の大出血で倒れ下曽我へと疎開する。その一年後、一九四五年（昭和二〇）八月上旬には広島と長崎に原爆が投下されたことに加え、ソ連が宣戦布告したことで日本は窮地に立

たされる。この時の様子を一雄は「何かもう滅茶苦茶といった感じである」と表現している。

そして一九四五年（昭和二〇）八月十五日、ついに日本は無条件降伏し、第二次世界大戦が終結した。一雄はその時の気持ちを以下のように述べている。

覚悟の上とは言へ、それが現実のものとなったショックはちよつと名状しがたい。これからどうなるのか。（略）先づ痛感したのは、かういふ際に病気などしてゐる我が腑甲斐無さであつた。

このように戦前には軍の力を信じ戦争の勝利を信じた一雄が、ミッドウェー海戦の敗戦で自信を失い、戦艦陸奥の爆沈に絶望していくという変化が浮き彫りにされている。海軍前戦慰問団として海軍の強固さを直接見た一雄にとって海軍の敗北は何より衝撃的であつただろう。しかしここで最も注目すべきは敗戦が近づくとともに一雄の体調も崩れていくことである。戦争と病気が重なつたことは一雄に大きな影響を与えたと言える。

次に敗戦後の一雄の心境を見ていく。無条件降伏をした日本ではマッカーサーによる間接統治が始まる。一雄はこの頃の気持ちをこう述べている。

疑心暗鬼といふか、占領にともなふあらゆる災厄が想定されて、不安にさいなまれた。（略）寝てゐる私は、新聞で読み、人づてに聞くだけで、当時の実際を自分の目で見たわけではない。

（略）この際最も戒心せねばならぬのは、自分の病勢らしい、と思はれてきた。

戦後の一雄にとって占領という事実は気がかりではあつたが、それよりも自らの病状の方へと意識は移っていく。以上のことから、作品論は戦争から病気への意識の変化や神道的思想に注目して進めていきたい。

三 二月の蜜蜂

『二月の蜜蜂』一八は、主人公の「私」一九が蜜蜂の観察から妹の死を回想する話である。「私」の家の隣家で蜂蜜を養っており、巣箱の前に来ると様々な蜂が思い思いに這い回っているのが見える。そんな中、老蜂が巣の外に出されるのを見て「私」は二十で死んだ妹の美枝を思い浮かべる。大正一年三月十八日に妹美枝は腎臓炎等の病気によつて亡くなった。「私」は妹の苦しみと悲しみは全て「私」が背負わねばならぬと思う。それから二年が経ち、今の「私」は頭の中で妹が自由に起き伏しするのをおだやかな顔付で見守るのであつた。

まずこの作品の虫の描写と、人と虫の関係性を見ていきたい。『二月の蜜蜂』の時系列は、「私」が観察する蜜蜂の動きが基となつており、それに過去が付属されている。そして全体を通して「私」が蜜蜂の観察者である描写が多いが、その観察対象である蜜蜂の動きは様々だ。例えば、作品冒頭に以下の文がある。

また考へ込んでゐる、さう思ひ、意識を蜂に向けるのだつた。
——無暗と後じさりをしてゐる奴がある。そいつは後じさりをして
しながら、とうく巢に入つて了つた。

「私」はよく蜜蜂を見ながら「ぼんやりと考へ込む」のだが、その意識は虫に向いていない。しかし「私」が蜜蜂に意識を集中させた際、蜜蜂は姿を隠してしまう。ここでの「私」と蜜蜂の関係性は密接なものとは言えない。しかし、「私」が蜜蜂の死を見た瞬間、「私」は妹の死を想起する。この点には両者の密接な関係性が見える。その蜜蜂の描写は以下の文である。

入道ひに一匹の蜂が斃れた同類を引いて出て来た。さうして一寸身構へたと思ふと、それを腹の下に抱へて、ぶーんと羽音をさせて飛び立つた。巢の掃除を始めたな、私は思った。役に立たない老蜂は、若い者たちが嘯み殺して了ふ、働いて働いてその巢に自分達の子孫の手で殺されて了ふのだ(略)だが、殺された彼等は、兎に角為すべきことをして了つてゐるのだ。二十で死んだ妹の美枝は——

ここでは、倒れた老蜂が一匹の蜂に腹の下に抱え飛び立っている様子を見て、「私」はすべきことをして子孫に殺された蜜蜂と対照的な妹のことを連想している。この一匹の蜂が倒れた老蜂を抱え飛び立つた描写と重なるのが作中にある妹美枝の描写である。ここでは美枝の死のきっかけともなった日の出来事、膝をつき歩けなくなつた美枝を「私」がおぶさり歩いたことが描かれている。

美枝が、不意にがつくりと膝をついたのだ。膝が雪に埋まつた。はずみを喰つて私はよろことした。「しつかりしろ！」云ふ私の声が少し上つてゐる。(略)「よし、おぶつてやる。おぶさるんだ。」私は屈んで、頑張つて背中を出した。「さう来い」妹は直ぐおぶさつた。(略)濡れてもいいと思ひ、私は傘を閉じた。とじた傘を背後に廻し、それに両手を掛けて妹を支へた。

この妹の描写が、改作された上で付け加えられた場面ということに注目すべき点だ。『二月の蜜蜂』は一九二五年(大正一四)四月同人雑誌「新潮」創刊号に発表され、その後一九二六年(大正十五)「新潮」で『早春の蜜蜂』と改題し場面が追加されている。その場面は以下の五つである。

一、二年前の美枝の一周忌を思い出す場面。三年前の妹の死によつて二月の氣候が心を陰鬱にするようになった。
二、Y氏が蜂に刺された様子に「私」は見入る。三年後の自分は妹の追憶からそのような蜜蜂の刺針の一撃に比すべき痛みは感じないと考える。

三、八年前の或る朝、「私」は美枝が大人の体になつたことを母から知らされる。

四、四年前の二月半ば、雪の中美枝を迎えに行く。美枝は弱り切つてその場で膝をついてしまう。「私」は美枝を背負い、歩きだす。
五、妹の親友K子は妹の墓に毎朝花を添えていたが、そのK子も一

〇日ほど前に亡くなつた。

梶井基次郎氏はこの追加された場面が「首尾照応してさきの蜜蜂を生かしてはゐる。」二〇と指摘している。これらは美枝が大人の体になったばかりだったということ、またその友達も死んでしまったことなど、若くして亡くなったことの理不尽さが強く現れる描写である。しかし四年前の出来事はその二つとは違い死が描かれているのではなく「死に至った過程」が描かれている。やはり四年前の出来事をあえて書いたのは興味深い。私はこの描写の妹が老蜂と重なり、働いてすべきことをした蜂とまだ二十歳という年齢で苦しみなから死ぬ事になった妹の違いが明確化されていると考える。

一匹の蜂が老蜂を殺さねばならなかったのは、蜂の中でのルールで不可欠なことだった。しかし「妹」はそうではない。人間として社会で生きる中まだ大人になつたばかりであった。それなのに両者はどちらも「死」を迎えてしまう。この理不尽さが「わが小説」で一雄が述べた「腹立たしさ」という気持ちを生んだのだと考える。この話では「私」は「貫して蜂の観察者だが、「私」の生死に対する考えは蜂からの影響が強い。つまりこの作品全体に蜂から人間への関係性があつたと言える。平野謙氏の「自然（この自然には人間の本能的なものもふくまっている）と人間」という問題の入り口から、こうして作者は生と死の問題にはいつてゆく。二三という指摘の通り、虫の描写が妹の生死を考える入口となつていけると言える。

次に、『二月の蜜蜂』の中で見られる死生観について見ていきたい。父の死後、胸部の病を抑えて登記所に行く「私」の元に妹節子が美枝の急変を知らせる場面がある。節子は来る途中雪の上に転び手に怪我を負い血だらけになつており、その様子を「私」は「これは少

し酷すぎる」と感情を露わにする。「いゝ加減にして貰ひたいものだ、おとなしくしてゐるからとて余り莫迦にするな。」と何者かに対して憤りを見せている。しかしその憤りの対象が何かは記述されておらず、「私」は結局「得体の知れぬ何物かに対して、実にしんから腹を立てゝゐた」にも拘わらず特に行動は取らずた立っている。

さらに次の場面でも、妹が二十歳の若さでなくなったことに「私」は「眼に見えぬ、無法極まる何者かに対して、猛然とつかみ掛ろう」としている。しかしその後先程とは違い「回想が浮ぶ度に私は頭を振」り、追想を拒否している。

さらに、この気持ちの動きには続きがあることを一雄は『あの日の日』で明かしている。抹消処分した小品「億ひ出したこと」の一節を以下のように上げている。

人の世のあらゆる希望を抛つて、夢見がちな若い女が死んでゆく。これ程までに死ぬのを厭がりながら、死んでゆく。それで済むのか、と何ものかに対して——詰寄る、とでも云ひたい様な気がした。やがて、興奮は鎮まつて来た。淋しい、と思ふ。底の無い寂しさであつた。あらゆる理想的人間意志に何の関わりもない冷徹な或る力、それは我々に対して善意もなく、悪意もない。悪意でもせめて持つてゐてくれたら、それを敵として闘ふことも出来る。だが、虚ろな無関心を我々はどう動かし得よう。

ここで何物かに詰めよる「私」の、興奮が鎮まつた後の気持ちが書かれてある。「私」はその何物かが「冷徹な或る力」で善意も悪意

もないことに何の動きようのない「寂しさ」を感じているのだ。このことから、『二月の蜜蜂』では「或る力」に対して憤りから拒否、寂しさへと気持ちが変わ化していることが読みとれる。

また作品中で「私」が蜂に意識を向けた際、蜂は後ずさりして巢に戻るように、「私」も「何者か」に直面した際頭を振って拒否している。このことは、観察者の立場として「人間」と同じように「或る力」があり、観察対象として「虫」と「人間」が同じ世界に存在していることを表していると言える。そしてその対比こそが、一雄に「人間」と「或る力」の明確な違いを気付かせ、「寂しさ」という気持ちを生ませたと考えられる。

この「或る力」に関しては先行研究で、永藤氏が「神なるものへの連想」^{二三}を生んだとし、唐戸氏が「その正体を見極める為に創作活動を続けることになる」^{二四}と指摘している。『まぼろしの記』^{二五}で中学時代父に、「神様つてもものは本当にあるのかしら」と質問し叱咤されている記述があることを考えれば一雄がすんなりと「神なるもの」を結論にするととは考えにくい。私は唐戸氏の、正体を見極める為創作活動を続けているという主張に沿い、今後この一雄がこの「或る力」とどう向き合っていくかを見ていきたい。

四 畑にゐる蟲

『畑にゐる蟲』は一九四五年（昭和二〇）九月に「オール読物」に掲載された作品である。主人公である「私」は親子五人揃って東京から小田原に疎開し、配給の不足を補う為畑地をふやすことになった。「私」は冷えを防ぐため下駄を履き毎日畑仕事をやる。ある日村

役場の人が武器調べをしに訪れ、「私」は槍や薙刀といった原始的なことで敵をやっつけられるのかと不安になる。また敵が上陸した際、家族はどう逃げるだろうかと考えながら、「私」は黙々と畑にいる虫を駆除し始める。そして戦後。一から十まで不満だらけな「私」だったが、娘は米空軍の機銃の葉莢を見つけ嬉しそうに弄んでいた。

『あの日この日』によると、この『畑にゐる蟲』が発表される一年前の一九四四年（昭和一九）九月末、一雄は病気の為妻松枝と母がいる小田原の家へと移動する。そして一九四五年（昭和二〇）六月頃は、体調も「自分で思ふよりは悪化して」おり、戦後の二十一年には「若しかしたら危ない」と感じている。

一方で世間は一九四五年（昭和二〇）八月一日に玉音放送が流され日本が無条件降伏、太平洋戦争が終結する。それから国内は被占領という流れを受け混乱する。そんな中、病氣の一雄に短編の依頼が届く。『あの日この日』では以下のようにある。

車谷君は『オール読物』の編輯をしてゐて、私に短編を書け、と言ひに来たのだ。腹這ひでなければもの書けぬ私にとつて、それは勿論苦行だったが、しかし書かねばならぬ。

この文から、『畑にゐる蟲』がまさに病氣と戦争が重なり弱っていただろろう時期に書かれた作品なのだと分かる。高橋宏宣氏もこの作品中の「私」について『私』は「感傷的」になる。そして『感傷的』である限り、戦後の行方を見定めようにも『頭』は働かず、『思考』は緻密さを欠き、まとまらない。^{二五}と述べており、一雄の緻密な意図が隠された心境小説という面よりも一雄の敗戦直後の思いが込

められた一作と言えるだろう。そのことを含め、虫と生死観の繋がりよりも虫と戦争の関わりについて今作は見えていく。

『畑にゐる蟲』で一番始めに書かれる虫の描写は以下の文である。

私は例によつて下駄ばきのまゝ畑に踏み入つた。トマト、茄子のテントウ虫、サル虫、白小豆の油虫、瓜のウリバエ——朝夕の二回丁寧に見るのでこれらの虫も多くはついてゐないが、全滅とまではゆかなかつた。

ここでは私がいつものように畑に入り仕事をすする様子が書かれている。注目すべきは、この文章の前に「私」の戦争に対する不安が描かれていることだ。

いろいろの情況から、私共はこの地への敵軍上陸をいつか覚悟してゐた。近所の社では、早朝が夕方、竹槍使ひの訓練をやつてゐた。(略)こんな原始的なことで、敵をやつつけられると思つてゐるのか知ら。何故戦車爆破用爆薬の使ひ方でも教へないのかね。せめて機銃操作ぐらゐ習はしても好きさうなものだ。

以上のような軍への不信、そしてその後についてかくる敵軍上陸を覚悟しながら家族が一体どうなるのかわからないと不安もありつつ「何とかなるだらう。」と「私」は言っている。この場面の後に「私」は「それ、虫を見て来よう。南瓜の花は君見てくれ」と言い、虫の観察を始める。しかし『あの日この日』の記述によると、一雄は畑仕事に直接手を出していないことが分かる。「野菜類の手入れを一手

に引受けてゐる(実際には母と松枝がやり、私は口をだすだけ)」と述べているのだ。しかし作品内の「私」は野菜の為虫を駆除している。つまりこの虫を駆除する「私」は一雄が意図して取り入れた話だと言っている。

さらに、『畑にゐる蟲』で「私」が朝夕二回畑を訪れ、虫を駆除しているが全滅とまではいかない、という記述に注目したい。この文章と繋がるのが『あの日この日』で一雄が述べている終戦間近の小田原の様子である。

田畑にゐる農夫でも、田舎道を歩く者でも、人影と見れば狙ふやうになつた。人々は道端の溝や小橋の下に身を隠した。各戸共防空壕は造つてゐたので、皆々そこへもぐり込んだ。

終戦間近の小田原は、グラマン機が幾度も海岸線から侵入し人を見れば撃つということを繰り返していた。この事実から、グラマン機の行動は、虫を追う「私」と被り、小田原に住む人間たちは追われる虫達と被つていると言える。この繋がりのある描写によって人の世界と虫の世界が混同し、その結果「私」は虫の世界へと入り込むのである。

次に、その後が続く十六テントウ虫の描写を見ていきたい。

十六テントウ虫は、油虫をよく喰つた。私はこの虫を見つけると、油虫のゐる葉や莖に移してやつた。彼は初めうろたへて無暗と駆け廻るが、ふと油虫にゆき當るともう何も彼も忘れてそれを喰ひ始めるのだつた。

ここでは「私」が直接虫を殺すのではなく、あえて油虫の天敵でもある十六テントウ虫を油虫のもとへ移動してやり、その後の行動を「私」が観察して間接的に虫対虫の環境を作り出している。油虫の保護者たる蟻共という記述を借りれば「私」は十六テントウ虫の保護者として油虫と対立していると考えられる。

しかし、その後「私」は人間こそが「最大の害虫たる場合があり得る」のだと感じた後、直接油虫を指でつぶしている。この人間こそ最大の害虫という思考は「私」が植物や虫の立場から人間を見た際に感じたものであり、ここで「私」＝虫という関係が見える。

『二月の蜜蜂』では蜜蜂の様子を見て「私」は「人間も虫けらも同じ」という現実を突き付けられ腹が立っているものの観察者であり続けている。しかしこの作品内では人間も虫たる場合があると気づいた途端「そんな中学生のやうな感想」と感じながらも遠慮なく虫の世界に入り込んでいるのである。南瓜の様子を見に行った妻も蜂の代わりに雌花に雄花の花粉をつけていることは、人が虫の生態系に入り込んだという事実を助長する描写だと言える。

「腹立たしさ」がなくなった理由としては高橋宏宣氏の述べた「感傷的」な状態が挙げられるだろう。またもう一つは一雄が病気で床に伏せ、「何時人間でなくなるかも知れない」ニテという、人間としての存在意識に危機感を持つたことが挙げられる。さらにそれに加えて戦争における自分達の追われる立場が虫の生態系における人と虫の対立を作者に想起させたのだ。

五 こほろぎ

『こほろぎ』は一九四六年（昭和二一）九月に「新潮」に発表された作品である。秋まであと二、三週間といったある日、枯草の間から幼いこほろぎが飛び出し、「私」はそいつを捕まえて子供たちに渡し虫籠に入れる。こほろぎを見た二女の圭子は疎開する前に上野の家でも夜こほろぎが鳴いていたことを「私」に告げる。圭子がおろぎに向かって用を足した次の日の朝「私」が病気になったのだと。その言葉に「私」はその頃のことを思い出す。戦時中のある日、圭子の言っていた朝「私」の体は病気に触められる。その事を圭子が知っていることに「私」は可笑しく感じ、さらに最近自分が虫などに心を惹かれていることに気付くのであった。

『あの日の日』によると『こほろぎ』を執筆したのは一九四六年（昭和二一）七月。日本の社会はGHQによる間接統治が続く一方で食糧不足によって闇市が全国で広がりその取締りが実施されている。しかし『こほろぎ』にはそういった日本の状況に関する記述は見られない。これは第二章でも述べたように、一雄の病状が悪化しており、社会よりも自らの身体に意識が向いていたからだと言える。『あの日の日』でも『こほろぎ』について一雄は以下のように述べている。

「こほろぎ」は、敗戦前年の八月末の早朝、上野桜木町の家で吐血した前後のことを書いた三十何枚の短編で、執筆時の二十一年七月時分、私はもう弱気の病人になってゐたから、今説み返すと、ことごとく追ひつめられたものの気持が感じられる。

『畑にゐる蟲』では敗戦によつて「私」は「感傷的」になつてはたが、ここでは病氣によつて追いつめられている「私」の姿があるという。その姿を明かす前にまず、虫の描写を探っていく。『こほろぎ』では作品中で「私」が直接虫について言及している部分が多々見られる。まず虫への意識の変化については以下のようにある。

自分がこの頃虫だとか草だとか、そんなものに心を惹かれがちなことと思つてゐた（略）今まで気にも止めなかつた小さな弱い者たちが、小さいなりに元氣よく動き廻り、生きて居、謂はば生存を主張してゐるのを見るのが、何か嬉しいのだ。それを見ることによつて、私はある安心を感じてゐる——と、さう云へさうなのだ。

ここから小さな虫や雑草といった気にも止めなかつた小さな弱い者たちが生存を主張している様に嬉しさと安心を感じる「私」の姿が見える。また、今まで気にも止めなかつたものを氣にするようになった理由について作品中で以下のように述べている。

つまり、俺は弱つてゐるのだ、参つてゐるのだ、と私は思ふ。一番判り易いところでは、身体の衰へに因るだらう。これは目に見えることで、ごまかしやうも無い。次には戦争に敗けたこと、そしてそのあとの世の様、これが氣力を萎えさせる。

この文から身体の衰えと戦争に負けたこと、この二つによつて「弱っている」「参つている」ことが「私」に小さな虫などの存在を意識

させたたとある。そして、遂に作中の最後には「私の仲間、小さな弱い生きもの共だ。」と述べ、虫が「仲間」であることを認めている。ではこの「仲間」という意識は作中のどこに見られるか、作中を見ていく。『こほろぎ』では冒頭から虫の描写が描かれる。以下はその文である。

毎日の習慣で、夕方、茄子畠を見廻り、てんたう虫だましやその幼虫であるさるむしなどを捜していると、茄子の根方に敷いた枯草の間から、幼げなこほろぎが飛びだした。長い触角の先が白い、それを活発に動かしてゐる。別につかまへる氣でもなく延ばした私の掌に飛び込んだので、それを捕え、茄子の害虫とりはもう止めて家の中へ入ると、子供に虫籠を持つて来させ、小さな奴をその中へ入れた。

「私」は農業をする人間として、敵である害虫のてんたう虫だましを捜しているがそこに現れたのは害虫ではないこほろぎ。幼いこほろぎは自然と延ばした私の掌に飛び込んでくる。『二月の蜜蜂』では「私」が「意識を蜂に向け」た瞬間、蜜蜂は「後じさりをしなから、とうく巢に入つて」いるが、ここでは正反対にこほろぎから「私」の掌に飛び込んでくる。これは注目する点と言えるだらう。

また、虫籠の中にある他の虫にも注目したい。虫籠には「教匹のニイニイ蟬、カナブン、トンボ、それから一匹のクサカゲロフ」が入っているが、この虫たちには、害虫ではないということと体長が数センチの小さな虫という共通点を持っている。「私」は「手作り野菜類につく虫になやまされ、これを少しでも駆除しなければ、

といふ實際的なことから、この頃虫どもに氣をとられてゐる」とあるが、その害虫であるてんとう虫だまは虫籠にはいない。作中その描写はないが、「私」の敵である害虫達は「私」によって殺されているだろう。しかし、そうではない虫達、前述した「小さな弱い生きもの」は子供たちの観察下に入る。

作中ではこの子供たちも虫達と並んで「小さく弱いこいつら」と表現されている。また、全体を通して子供たちがメインとなり話が進められている。そして子供が人と虫との関係性において大きな役割を担うのが以下の文だ。

「もうせん、上野のおうちで、夜、こほろぎが鳴いたねエ、お父ちゃん」(略)「そして、こほろぎに、圭ちゃん、おしっこかけちやつたねエ」「うん、さうださうだ」「そして、朝、お父ちゃん、こ病氣になつちやつた」「さうさう、みんな覚えてゐるんだねえ、圭ちゃんは。」

ここで最も注目すべきは、二女の圭子がこほろぎに向かつて用を足した次の朝、「私」が病氣になつてしまう点だろう。ここでは圭子が「私」とこほろぎの密接な相関関係を仄めかしている。その一方で「私」は、こほろぎはまだ鳴いているが「圭ちゃんはまだ泣かないね」と言うように、こほろぎと圭子の関係を作り出している。

このように「私」は作品を通して虫と子供たちを同じ「小さく弱い」存在とし同化させているが、圭子が「私」とこほろぎの相関関係を指摘することでさらに「私」もがその「小さく弱い」存在の中にあることを暗示させている。

以上虫の描写を見て、これまでの作品との大きな違いは三つ。一つ目は「私」の立場の変化。「私」は捕えた虫は子供に渡し、子供たちがこれまでの「私」の役割を引き継ぎ観察者となっている。二つ目は「私」の虫に対する興味。観察の必要性もない小さな虫達に興味を持っている。そして三つ目は「私」と虫の関係だ。「私」と「小さな弱い生きもの」は「仲間」になっている。

次に『こほろぎ』で現れる生死観を見ていこう。「私」が子供に渡した虫たちは虫籠に入れられるが、その虫籠では大方の虫が死んでしまいクサカゲロウだけが生き延びる。その様子を見た「私」が以下のように述べている。

蝉もブンブンも、ごろごろ死んでゐるのに、命の短いカゲロウだけが、ちゃんと卵を生んでゐる、つとめを果たしてゐる。面白いものだね。

命の長短の理不尽さを嘆いた『二月の蜜蜂』とは違い、ここでは虫達の命の長短を「面白いものだね」と言っている。

高橋宏宣氏は『自然』は如何なる『私』をも許容し、受け入れてくれる。『私』は自らの生を、『自然』のなかに定位し、『安心』を得ることに成功する。」と述べているが、この論の通り、これまでの虫作品とこの作品の大きな違いは「私」が虫の生と死、どちらの側面を見るかということではないか。『二月の蜜蜂』では老蜂の死と、妹の死を比べ「腹立たしき」を感じることが、『こほろぎ』では極限の中でも生きるカゲロウがいること、小さな虫達も生存を主張していること、そして「私」もまだ「急なことには」ないということ。死という

ものが目の前にありながらも生きていることに嬉しさを安心を覚えている。だからこそ、ここで私は虫の生に対して「面白い」と言えたのだろう。生を見るか死を見るか、これが二作品の違いであり一雄の大きな変化と言える。

おわりに

虫作品を三作品見た結果、戦前の『二月の蜜蜂』と戦後の二作品には大きな違いがあることが分かった。

『二月の蜜蜂』では虫と妹の死を比較したことで、死に対する理不尽さを感じ、憤りを露わにする。しかし『畑にゐる蟲』にはその憤りは見られず、敗戦が「私」の意識を占め、『こぼろぎ』では身体が弱っていることが小さな虫の存在を意識させ、虫が生きている姿に「私」は面白さを感じている。「私」が死ではなく生に注目することと肯定的に死を見る視点を手に入れたという点で『こぼろぎ』が一雄の思想の転換点だと言える。

一雄が死ではなく生を見るようになった原因は戦争であると言えるだろう。『畑にゐる蟲』の作品論でも触れたように敗戦直前には一雄が住む小田原にまで米軍のグラマン機が現れるようになり、死が身近にある状態となる。『あの日この日』によると、そこで一雄は「老いた母や病む私と同様、ここに居据つて運任せ、といふ人もあつただらう。」というように病によつて動けない為、自らの命は「運任せ」という状態であった。この「運任せ」にし、駄目ならば駄目だと諦めざるを得ない状況こそ、一雄に「諦念」を生ませたと考えられる。

しかしこの「諦念」は否定的なものではない。『あの日この日』に

も敗戦で誰もが途方にくれる中「何としてでも生きねばならぬ」「命あつての物種、何事もそれからだ」ということが「最後の防衛線」として心にあつたと一雄は述べている。つまり、ここでは死を見るのではなく生を見ることで一雄は活力を見出す。そして作品内でも死を目の当たりにした際、他方の生きている存在に注目する。よつて一雄の「諦念」は生への意識を持った肯定的な「諦念」だと言える。

一 斎藤兵衛「新年号の諸作品 文藝時評」(『文学界』一九五三・二)

二 本多秋五「八月号の文芸作品評」(『信濃毎日新聞』一九六二・七)

三 題名に虫の名前が入る作品と同時代評や先行研究で虫の描写に關して指摘があつた作品をこの論文で「虫作品」と呼ぶ。

四 「私の小説作法」(『毎日新聞』一九六五・二〇・二〇)

五 「虫も樹も」(『群像』一九六五・八)

六 「わが小説」(『朝日新聞』一九六一・一一・九)

七 浅見淵「尾崎一雄論」(『群像』一九五二・七)

八 高橋英夫「存在の揺らぎと重さ」(『群像』一九七六・九)

九 戸川民雄「尾崎一雄(独自性)の獲得——『二月の蜜蜂』と『暢気眼鏡』を中心に——」(『立正大学国語国文』二〇〇一年度)

一〇 石原千秋「忘れられそうな小さな日常——尾崎一雄」(『国文学解釈と鑑賞』二〇一一・六)

一一 永洲道彦「尾崎一雄『虫のいろいろ』論——作為ある作品構成と私小説的素材をめぐって」(『筑紫国文』二〇〇三・六)

一二 永藤武「尾崎一雄の宗教的感性」(『神道宗教』一九七九・九)

一三 永藤武氏によると、一雄は「まぼろしの記」(『群像』一九六一・八)の中で父のことを「非常な敬神家」と述べている。

一四 相賀徹夫「『万有百科大辞典四哲学宗教』(小学館一九七四・一一)

二五脚注一四に同じ

二六一九七〇年一月～一九七三年二月まで『群像』で連載したものをまとめた『あの日の日上・下巻』（講談社、一九七五・一）と一九七八年一月～一九八〇年七月まで連載したものをまとめた『続 あの日の日』（講談社、一九八二・九）のことを指す。

二七「海の会」という軍事雑誌を出す出版社の編集員松本頼樹によって結成された会。有志の文学者が集まり、海軍の人間から話を聞いた。

二八一九二五年四月同人雑誌「新潮」創刊号に「二月の蜜蜂」を發表。

その後一九二六年「新潮」で「早春の蜜蜂」と改題。一九三七年第二短編集『竹盗人』（砂子屋書房）に収録する際「二月の蜜蜂」と名前を戻している。

一九一雄の作品は心境小説である為、作品内の私が必ずしも一雄と一致しないことから「私」と呼ぶこととする。

二〇梶井基次郎「新潮十月新人号小説評」（『青空』一九二六・一一）

二一平野謙「今月の小説（中）」（『毎日新聞』夕刊一九六一・七・二九）

二三脚注一三に同じ

二三脚注九に同じ

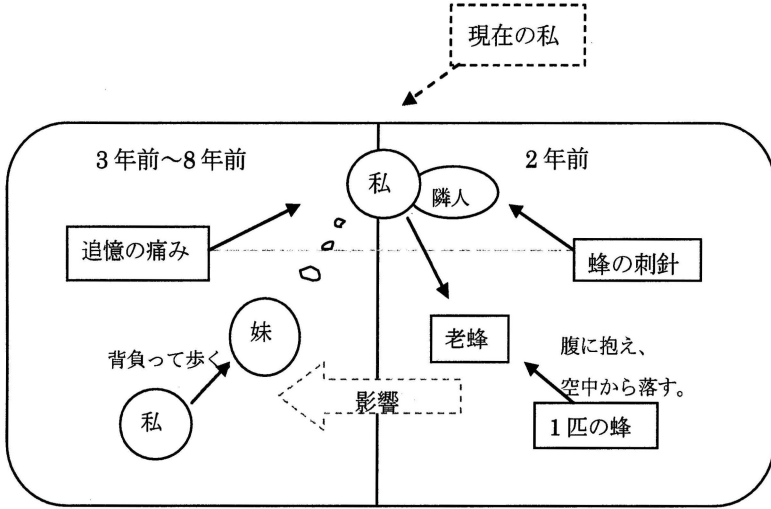
二四『まぼろしの記』（『群像』一九六一・八）

二五高橋宏宣「思考する主体の確立をめぐって——尾崎一雄「田舎がたり」から「虫のいるいる」まで——『研究紀要』福島工業高等学校専門学校二〇〇六）

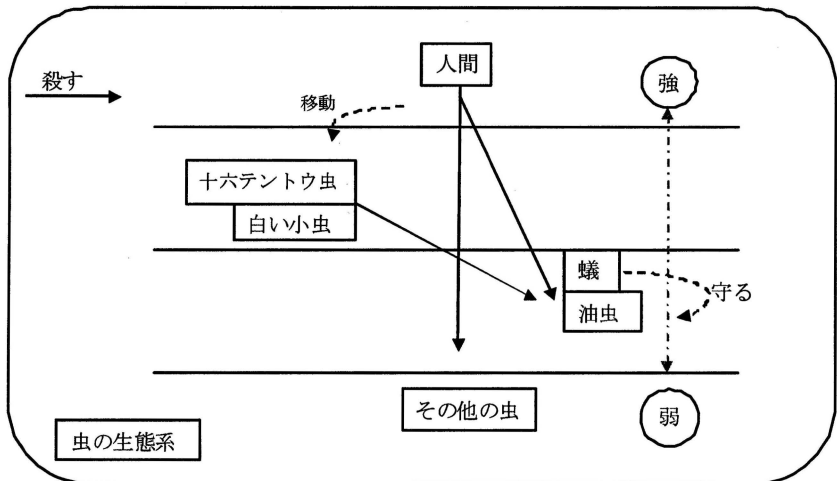
二六「文学我観」（『文学行動』一九五〇・一）

資料編

図一 『二月の蜜蜂』における人と虫の関係図



図二 『畑にみる蟲』における人と虫の関係図



表一 尾崎一雄年表

年号	年齢		雑誌に発表した作品 ()⇒月 太字=虫作品
1899(明 32)	0歳	12月25日三重県渡会郡宇治山田町(現伊勢市)で神宮皇学館教授八束と母タイの長男として生まれる。弟二人、妹二人の五人兄弟。	
1920(大 9)	21歳	2月父死去。一雄は一家の長になり遺産を手にする。4月に早稲田高等学院に入学し9月に同級と共に回覧雑誌「極光」を創刊。	
1921(大 10)	22歳	1月に肋膜炎にかかり1年間休学。	
1922(大 11)	23歳	妹セイが病気のため亡くなる。	
1923(大 12)	24歳	志賀直哉を訪ねる。9月関東大震災によって下曾我の郷家全壊。	
1926(大 15)	27歳	「早春の蜜蜂」で初めて原稿料を受け取る。	「早春の蜜蜂」(「新潮」10月号)
1931(昭 6)	32歳	8月に松枝(大正2年5月生)と結婚。	
1933(昭 8)	34歳	11月『人物評論』に発表した「暢気眼鏡」が読売新聞にて激賞を受ける。	「河」(4) 「暢気眼鏡」(11)
1939(昭 14)	40歳	1月弟弘夫死す。4月正男死す。6月二男誠が生まれるが9月死す。	「焼ヶ岳」(8) 「正男のこと」(8)
1941(昭 16)	42歳	1月海軍省属託として、1か月余り南支方面海軍部慰問視察団の一行に加わり、海南島など各地を巡る。2月圭子生まれる。	「病馬廠スケッチ」(1) 「猩々」(9)「虎」(10)
1942(昭 17)	43歳	7月頃より健康が衰え始める	
1944(昭 19)	45歳	8月胃潰瘍の大出血にて昏倒、郷里へ疎開することを決意し、10月一家を挙げて下曾我に帰る。一雄はそこで生存第一次計画を立てる。	「田舎がたり」(8)
1945(昭 20)	46歳	老母と子供三人を抱え、無収入で難儀する。また胃潰瘍の他神経痛にも悩まされる。	「畑にみる蟲」(「オール读物」9月号)
1946(昭 21)	47歳		「或る復員兵の話」(2)「山下一家」(3)「妻の友達」(9) 「うなぎ屋の話」(10)「こぼろぎ」(「新潮」9月号)
1947(昭 22)	48歳	4月母タイ、71歳を以て死す。一雄も病状が思わしからず。	「亡友への手紙」(1)「病牀記」(6)「落梅」(9)

卒論で扱う年代

1948 (昭 23)	49 歳		「美しい墓地からの眺め」 (6)「虫のいろいろ」(「新潮」 1月号)
1949 (昭 24)	50 歳	初めての長編「煩い春」を3月から10月 までの7カ月に渡り『風雪』に連載したこ とで健康に自信を得る。	「坊主神主」「痩せた雄？」 (1)「煩い春」(3~10)「芳兵衛 物語」(11~)「なめくぢ横丁」 (9)
1950 (昭 25)	51 歳		「『相模湾産後鰓類図譜』 と『アカハタ』」(1)「トラ の話」「小鳥の声」(4)「冬眠 居閑談」(「展望」8月号)